
柏市立未整理文書庫 攻性対策班

市場良子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柏市立未整理文書庫 攻性対策班

【Nコード】

N0791S

【作者名】

市場良子

【あらすじ】

治安維持のために公務員しか魔法が使えない世界（というか魔法の存在を消し去ろうとする世界）で、機密保持のためにエンチャントされた本の整理を行う未整理文書庫の、畑違いである攻性対策班の動きを見る。

攻性対策班 その一 ・よくわからない三段回想（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

~~~~~

公務員でしか魔法は使えない。

この世界では魔法とは個人の扱えるエネルギーを量的及び質的に変化させるものだからだ。当然、規制無しではあらゆるシステムがダウンする。国（ここではそこに住む民の最大の、安全と資産の保障機関と定義する）はおろか、文化や技術も発達しないことは容易に想像出来る。

仮に個人農家がたまたま、大きな魔力（魔法の規模を決定する要素、もしくは増幅できるエネルギーの上限を決めるものと置き換えていい）を持っていて使用する。季節を無視し、大きく実った農作物に消費者は満足するだろうが、市場は縮小する。

魔法は後天的に鍛えることも可能だが、魔力は先天的なものだ。さらに、才能のバラツキが魔法＞知能のために、規制無くしては一部の才能が市場を操作及び独占し、競争力の低下で関わるもの全て進化することが難しくなる。誰もが魔法を極めようとする世界では、そもそも技術や文化が失われることも想定出来る。リソース消費無しで空が飛べるなら、車に乗るのは魔法の使えない一部の落ちこぼれだけになる。車が一部だけになれば物流の流れはおかしくなる。そうなつては経済は崩壊する。経済がおかしくなれば失業者は増加し、それに伴い治安も低下する。経済どころか国のシステムもダウンする。

~~~~~

とにかく、過去の為政者たちは魔法の存在を忘れさせようとした。
そしてそれは今も続いている。

魔法が使えるのは、治安維持を目的とした一部の公務員のみである。

攻性対策班 その一 ・よくわからない三段回想

高砂友美が千葉県警の尖兵として彼の現在の自宅に向かった時、彼女の心には義侠心しか無かった。

その日の午前、柏市役所より五分もかからない場所に建っている、公民館によく似たその施設の2F、喫煙ルームで友美がセブンスターを味わっていると、彼女の同僚である間中美香が入ってきて言った。「貴女のことを止めに来たの。彼のことは全て県警に任せなさい」

産後休暇を経て職場に復帰した彼女を前にしても、友美は煙草を吸うのを止めなかった。

ベンチから立ち上がりながら友美は言う。「分煙機が利いてない部屋でお話するなんてね。労働環境の改善を総務課にガツンと要請しとかなきゃ」

その意図は届かなかった。「貴女は唯一、威力偵察で生き残った。それで十分じゃない。貴女の口から彼の情報が出てくれば、県警も対応できるわ。貴女がもう一度対峙する理由にはならない」震えている美香の声は、将来における友美の安否を気遣う心が根っこにある。

友美は言う。「天国に行った元同僚の家族が、霊園で私をぶん殴ったことを思い出すとね、勇気が湧いてくるの」

相手が文脈に沿った返答をしない。ようやく友美の決意が伝わったようで、友美は喫煙ルームでまた一人になった。

体型が過度な肥満である友美は少しでもスタミナを温存するべくベンチに座り直して、目を閉じた。すぐに友美の意識は外界からの情報を遮断して、心の深層にある彼女の城に到達した。

職場である柏市立未整理文書庫では、優秀なエンチャター、（もしくは魔法使いと称してもかまわない！）が日々、機密保持のためにエンチャントされた文書類を整理している。

彼女の所属している部署は中でも特に特殊だった。選り抜きの精鋭が揃っていると言っても良い。機密の積極的防衛という名分の下に、彼らは犯罪を防ぐ。どのような過程を経て設立されたのかは知る由もないが、「未整理文書庫の攻性対策班は公安職」と言われるほど権力が広範囲かつ強力である。情報収集を欠かさず、犯罪の恐れありとボスが判断を下せばすぐに行動、陰険かつ執拗な監視からの現行犯逮捕は完全に、未整理文書庫のどの業務とも、畑が違う。

彼女、友美は対策班だけでなく、未整理文書庫全体で浮いている存在である。

高度な演算能力、指向性が多様、軍隊出身、誰もがハイスペックであるその中で、彼女は過度な肥満系で運動には適さないばかりか、国家試験？種で公務員となったので、「高卒程度の学力」の持ち主である。

公務員に成り立ての頃、彼女は散々陰口を聞かされた。彼女の自尊心はその度に削られた。

だが、心底負けなかった。さらに、彼女のメンタリティは卑屈を良しとしなかった。

攻性対策班に異動命令が出た時、周囲の反応は蜂の巣を突つついた様なものだった。人事部の責任者には連日抗議のメールが届いた。これを見て対策班のボス、椎野眞子は心配した。

（想定してはいたが、これほどになると問題がある。特に本人の気持ちだ）

友美が初めて対策班の扉をノックした日、椎野眞子は気分が憂鬱だった。

「始めまして。本日より攻性対策班に配属されました高砂友美で

す。ご指導のほどよろしくお願いします」

椎野眞子は鬱の気を晴らすべく、勢い良く挨拶した。「こちらこそよろしく。椎野眞子だ。ボスと呼んでくれ。私は部員を全力でサポートする。労働環境を改善する。君が仮に、どでかい銃で、どや顔の犯罪者を潰してやりたいと思うなら、私があちこちに手を回してやる。さて、ここがどういう職場なのか言ってみろ」

友美は無表情に答えた。「秘密を覗こうとするとや顔の犯罪者を潰してやる職場です」

「そのとおり」椎野眞子は友美の心情が掴めないままだった。力を込めて椎野は続ける。「だから我々は、私は、優秀な人員を集めている。そしてひとつ言っておきたい。私は君をとても欲しいと思つて上を説得した。私は君を強く望んだ。君は気づいていないかもしれないが、とても将来性のある」

「知っています」ボスの言葉を途中で遮つた友美の様子は微塵も変わっていないかった。

椎野眞子は言葉を失った。

友美は続けた。「私には組織に貢献出来る能力があります。仮にボスが海外の戦場へ視察員として私を派遣するとします。良いでしょう。私には戦場で生き残る力があるからです。ところで、私の異動理由は多様性のため、でしたか？」

実際の所、友美はこの上ない熱さでやる気がたぎっていたのである。

それを椎野は察する。

「そうだ。同じ規格で構成されていると、弱点を突かれた時に全滅の恐れがある。多様性、そして所員の進化のために君は望ましい」友美は初めて椎野の前で笑みを浮かべた。「だとすると私は限りなく重要な駒になりますね。私はボスの意向に答えることが出来るでしょう。なぜなら、攻性対策班に所属する方々には私のような力がありませんので」

椎野眞子も笑った。「とても頼もしいな。君がこれから攻性対策

班で何が出来なのか、見守らせて貰うよ」

この時のことを友美は特別なシーンとして彼女の城に展示されている。目を瞑り、意識を城に持つていく毎に、彼女はそのシーンを見る。これは彼女に自信をもたらしてくれる。

次に友美は、冷静さと知恵を彼女の城に求めた。

すると、事件の進行具合をまとめるファイルが彼女の意識に届いた。

友美は前半のページを見る必要が無かった。なぜなら彼女は今回の件に全て関わって来たからである。名目上はボスが責任者だが、捜査は全て高砂友美が取り仕切っている。非常に大きな危険を理由に、友美は責任を負わずに済む。だが、彼女を始め、対策班は手を抜かない。決してあきらめない。ボスに報いようとする。

後半のページに目を通す。彼女はそこに冷静さと賢さを求めるつもりだ。被疑者の情報が、捜査の進行状況と成果が項をめくる度に増えていく。

そして緊急を表す薄い色がついた項が唐突に現れた。

友美の意識は目をこらす。

被疑者の居場所が特定されたことを理由に、威力偵察の実行を提案し、受理されたことを表している。

ここ数ヶ月で彼女が「失望の塊」と呼んでいる威力偵察実行時の記憶は、何度思い返しても、彼女を苦しめ、彼女に義憤の炎を上げさせた。

記憶がもう一度、再生される。

被疑者の存在が確認されている流山のとある一軒家の前に、さりげなく二台の白いバンが止まった。

車体に自動車教習とプリントされている方のバンは、少し時間が

経ってから目標から離れ始め、ぎりぎり目視出来る距離で止まった。そのバンには追跡と解析のエンチャントのハイブリットをいつでも放出できるよう、未整理文書庫の調査部が数人待機している。そして現場に残され、水道局と車体にプリントされたバンの中では、対策班の高砂友美とその部下である伊藤と平井が、不認識と思考並列のエンチャントをしている。彼らは水道局の人間に見えるよう、青い作業服で身を固めている。運転席には伊藤がいる。後部座席には友美と平井がいて助手席には誰もいない。運転席の人間が殺される事態となつては、助手席も棺桶のひとつになり得るからだ。

「威力偵察の目的を答えてみて、平井君」友美は言った。

「目標の内情を知るためです。また、いつでも逮捕出来るように反応を引き出すのも重要です」緊張の面持ちで平井は言う。彼は友美より五つ年上だが、本人の希望と友美の推薦で現場に回された。

伊藤が平井の言を引き継ぐ。「人間は魔力を持っています。それは当然ながら混乱を招きます。過去の為政者は国民に魔法の使い方を忘れさせようとし、また、法で縛りました。現在魔法が使えるのは各国でも公務員のみで、国連は一般人の魔法の使用を禁じています。国連のそれは強制力は無いものの、日本国内では法に明文化されています。故に威力偵察で魔法による反撃が試みられた時、それは犯罪です」

友美は満足した。部下と自分の意思が統一されていることに。「調査部の準備が整い次第、平井には言つて貰う。伊藤も警戒を怠るなよ」

運転席から伊藤が振り返る。「僕には組織に貢献出来る力と意欲があります」

友美には意図がすぐわかった。伊藤は運転役が不服だと言っているのだ。

戒めるような気持ちで知美は言う。「危険な任務だ。不慣れな職員を使うわけにはいかない。対策班の仕事は誰にでも出来ることではない。それが運転役だとしても」伊藤は何も言わなかった。代わ

りに軽く笑みを浮かべて体を前に戻した。

友美は遮光ガラスの向こうにある家に顔を向けた。閑静な住宅街の中にある狂気を見つめて彼女は思う。（彼はきつととても強いだろう。だが、私たちの方がもっと強い）

「『自動車教習』より報告。準備が整ったと」静寂に溶けるような小さな平井の声。

「攻撃開始前に視覚の共有と報告を。平井、行け」
バンの横腹から出た平井を彼女は横目で見送る。

（問題は無い。クールに行け平井）

友美は心の中で何度も、聞こえない激励を平井に送った。緊張の証だった。

対策班の一員として勤務してから、友美は何度も長閑な風景の中で命のやり取りを経験した。

あの不気味さ。裏表の激しさは対策班の彼らが背負い込むしかない。

（対策班は負けない。私は自分に、そして部下や周囲に一定のレベルを求める。そこに妥協は無い。私は何度も地獄の淵を歩いたつもりだ。例えば相手が『快樂のアパート』と称されたあの男であつても、私の積み上げてきた忍耐と成果が彼を粉碎するはずだ）

攻性対策班 その一 ・よくわからない三段回想（後書き）

誤字を発見。訂正しました。

もう一回訂正。推敲はしっかりやれということですね。

攻性対策班 その二 ・よくある犯罪者プロフィール（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

魔法の使用は国の防衛力にも影響を与える。

個人の資産に頼る防衛及び侵攻（侵攻は積極的防衛のひとつである。そもそも軍事行為は外交の一つの手段に過ぎない。仔細は省くが、魔法の存在で軍隊のような機構そのものがいらなくなる可能性もある。極論を言ってしまうと、外交も必要無くなる）は指揮系統を簡易にする。それはつまり、全体で一つになり結果を残すチームワークの水準を下げる。魔法は、才能の無いものをさらに無力にする。

さらに国家の防衛に魔法が直結するならば、当然、国としては魔法に関わる『者』『資源』『技術』を保護するしかあるまい。だが、それは貴族階級を生み出す。貴族階級によって生ずるコネクション（人間関係）は『魔法が使えない代わりに、その他で努力する者』を腐らせる。

攻性対策班 その二 ・よくある犯罪者プロフィール

後に『快樂のアパート』と称されるその男、御木はそれまで真面目という評価を周囲から頂き続けた。

松戸市にて浮浪者が多数、全体から水分がこっそりと抜け落ち、干物の様な死体となって発見された。

捜査本部が設立された時、犯行が可能な人物のリストの一番下に申し訳なく御木の名前があった。最も優先順位の低い、とどのつまり犯人とは思えない人物であったということだ。

現場から近い場所に偶然、御木が居たと、優秀な捜査官は揃って言う。身辺調査を行うと、その潔癖ぶりがよく分かる。とある政治団体のお手伝いをし、近隣の住民からの信頼は厚く、頼まれれば一時的にボーイスカウトにもなった。仕事はとある大企業の下請けで立派な市民である。

だが、最も疑わしい被疑者、ホームレスをミイラにした糞犯罪者に最も近い人間たちをリストの上から順番に調べても、埃すら出なかった。捜査陣は形式的に御木の調査に当たった。

彼の人生に不可解な謎があることが判明して捜査官たちはどよめいた。出所は保健所である。

動物愛護団体の活動に参加している御木は保健所で子供たちの訴えを聞いた。

笑うと素敵なえくぼを浮かべる少女が、涙ながらに「もっと楽に出来ないのか」と彼に言う。

欧米では注射で一匹ずつ、苦しみを与えずに楽にする。だが、こ
こ日本では、ドリームボックスと呼ばれる動物専用のガス室で、数
十分の苦しみを大量の犬や猫に堪能させてから命を奪う。

御木は言った。「もしかしたら、今日だけは楽に行けるかもしれ

ないよ。さあ、祈って。今の僕らにはそれしか出来ないだろう。もう帰ろう。色んな人が改善を求めて政治家に働きかけている。いつか、彼らが苦しまなくなる日が来るよ」

保健所の職員はよく覚えている。どのようなツテかは知らないが、動物愛護団体が直接乗り込んで視察するのは異例のことだし、何より、彼らが立ち去ってから、処分の予定が入っている動物は皆、夢の箱に入る前に死んでしまった。体の水分が極端に無いこと以外、何もわからなかった。

慎重な捜査官たちはデコイを使うことにした。牧野という若い、ショートカットの可愛らしい潜入捜査官である。加美という名前で牧野は彼の私生活に潜り込んだ。

100%の情報で人は決断するわけにはいかない。即効性が無くなるのはつまり、好機を逃がす。大体、人は50から70の情報で決断しなければいけない。つまり、捜査官たちは運が悪すぎた。

とても酷い状態で牧野の死体は発見された。どのように酷いかは記しない。彼女が身に着けていたボイスレコーダーの最後にはこのような会話が残っていた。ロケーションはどうやら御木の家である。捜査陣が牧野を放って二週間もしない。彼女はとても有能だった。

「・・・」

「・・・ん？加美どうしたん？」

「ううん・・・」

「・・・」

「・・・ねえ、御木さんて公務員なの？」

「なんで？」

「魔力感じるから・・・」

「え？何それ？」

「国との人事交流でさ、似たような・・・」

「なるほどね・・・」

「・・・」

「公務員じゃないよ僕は」

「・・・」

「でも魔法が使える人間だったらどうする？」

「・・・考えてない」

「・・・」

「・・・小説みたいに、色々出来るの？」

「うん。人をゴミみたいに扱える」

「じゃあ私をゴミみたいに扱ってみてよ」

しばらく会話無し。拾えた音から察するに、ここからしばらく加美こと牧野は台所で何やら作業しているようだった。これより前に、食事と考えられる記録が残っていたので、恐らく牧野は後片付けをしていたのだろう。だいぶ時間が経ってから御木の声。

「特に問題ないよ」

そしてここから彼の進撃が始まった。調査と記憶再現のエンチャントの痕跡が牧野の死体から検出されたので、御木はどうやら自分に嫌疑がかかっていたことを知っているようで、その上で囷捜査官を殺害したのだから、擬態することなく、すぐに消えた。

捜査官たちは牧野への弔いに、御木をあらゆる手段で陰険に追いかけて回そうとした。

しかし、計算違いがあった。ホームレスの殺害、牧野の殺害、これだけで御木の力を計ってはいけなかったのだ。この事件に回された警察官たちの人数は膨大となったが、指揮系統の上位に位置する捜査官の数は変わらなかった。これがいけなかった。

牧野が死んで一ヶ月余り、執拗な御木の搜索の途中で、捜査官たちがおよそ半数殺された。

どれも異なる殺され方であった。

なりふりかまっていられなかった。残り半分の捜査官たちは、戦友の死体を暴き尽くすことを決定した。

署の禁呪課に戦友たちは運ばれ、調査のエンチャントの上位置換

によって暴かれた。

そして捜査官たちは慄いた。

戦友は全員、不意打ち奇襲で死んではいない。真っ向から御木と戦い、死んだのだ。

そして禁呪課に勤める新部は重要なことを告げた。

「御木の思念が伝わってきます。これはとても重要なことです。心して聞いてください。まず、貴方方戦友のお体に御木の思念が残っていることで、それだけで強力な自我もしくは思想の持ち主であることがわかります。そして、ここから私が言うことはとても残酷であることを覚悟してください」

恐怖に負けないよう必死で堪えている捜査官たちに、さらに慈悲の無い事実が告げられた。

「彼らはゴミのように扱われました。魔法のエキスパート、犯罪者を幽閉するために徹底的に練り上げられた魔法の技術が、御木の力の前で、ゴミのように息絶えていきました」

そして静寂が訪れた。そのうち、捜査官の一人が新部に質問をした。「彼の思想とは？」

新部は躊躇わない。「これだけの力をどぶに捨てるのは惜しい。こんなでたらめな力を発揮することが楽しい。とても楽しい。特に最近では、同種と力を競い会うのが快感だ。これが御木の思想です」
新部は続ける。「さらに、私が貴方方の戦友を暴いたのと同様、御木も禁呪のエンチャントを使っていることがわかりました。御木にはこれまでの捜査状況が渡っていると考えられます」

「そして提案します。これは禁呪課の私が言うことではありませんが、貴方方たちはすぐに指揮権を移動させるべきです。そして、千葉の未整理文書庫にこの件をお伝えください」

「なぜ千葉で、未整理文書庫なんだ？」捜査官の一人が言う。

「彼はどうやら千葉に向かったようです。葱を背負った鴨がいるからです。千葉の未整理文書庫は都内の文書庫の次に値します。弱すぎず、かといって都内ほど強くはない。そして、勝利の報酬が公

安職に属する者及びエンチャントの機密情報なら、腕試しを望む御木はそれをするでしょう」

この日から数週間で、警察官の殉職、魔法の研究が一部認められている大学教授やNPOの職員の死亡が多発した。社会的地位が御木のストッパーになっていたが、もう彼を止めるものは無い。同種と競い合いたい、戦いたいという自分の欲求に忠実に様々な人間を葬る。どれも同じ殺され方は無かった。

欲求に従って動き、同じ殺し方をしない彼は『快樂のアパート』と称されるようになった。

攻性対策班

その三

・現段階で御木が絞首台から逃れる可能性がある理由に

この物語はフィクションであり、登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。

~~~~~

過去の為政者は例外なく全て、魔法の野放しを許さなかった。

社会主義建設のため6200万人（現在平成23年三月の東京都の人口は1300万人）殺した指導者や特定民族の大虐殺を行った指導者ですら。

~~~~~

デスクに肘を突き、顔の前で手を組んでいる椎野眞子はなかなか威圧的である。

高砂友美は切り出した。「これから私が話すことは、御木の首をくくらせるのに非常に大事です」

椎野眞子は間隔を空けずにリプライする。「君が数日前に提案した威力偵察のことか」

「そのとおりです」友美は満足する。

続けて言った。「残念ながら、現段階で御木を捕まえても絞首台に昇らせることは難しい」

椎野眞子は姿勢を正した。彼は自分の感情を身振り以示す。本気で聞いているぞ、と身体で主張する。

「まず言っておきたいのが、ホームレス殺害の件は誰が犯人なのかわからないことです。なぜなら、死体だけあって他に物がないからです」

つまり、と椎野眞子は言う。「御木とホームレス殺害を結びつける証拠が無いということだな。保健所は調べたか？」

はい、と勢い良く知美は言う。「魔法の痕跡は残っていませんでした。風化です」

「最初に事件に当たっていた捜査官たちはどうしようとしていた」

「まずデコイを使いました」

「あの娘の父親とは知り合いだった。残念だ。それで？」

「なぜデコイを使ったのか、ということですよ」

なるほど、と椎野眞子は言う。「デコイを使ったのは疑いをはつきりするためで、そしてそれは最悪の形で失敗した。君の言いたいことが段々わかってきた」

「現段階で御木を捕まえてもホームレスの件では裁けないと。しかし、牧野を始め、様々な警官や一般人を殺している件でなぜ奴の

心臓を止めてやれないのだ」

「人選です」短く友美は答えた。

椎野眞子は数秒止まった。そして口を開く。

「奴が殺した一般人や公務員連中は全て好戦的な者だった。人殺しを捕まえるためなら何でもアリで、しかも自分たちで行動してしまっ」

椎野眞子は顔をゆがめる。「不当捜査と正当防衛で生き残るつもりだと？陪審員たちはそんなにおろかじゃないぞ！」

友美は無表情に言葉を投げかける。「残念ながら御木には可能でしょう。彼のコネクションを調べました。彼が普段付き合っていた政党や団体は、公権力に反発したくてたまらない連中ばかりでした。そしてその中には高名な弁護士先生方も含まれる。仮に弁護士連中がよってたければ、元々御木を知っている連中は彼を助けるでしょう。そして陪審員を動かせるでしょう。御木本人もそうするつもりで次々と見境無く動いているのでしょ」

友美はそこにこりと笑った。「以上は推論ですが、私は楽観的な人間ではありません。確実に御木を死刑にするため、威力偵察によつて彼が危険な人間であることの証拠と、確実に連行するための情報を入手します。なので裁判所に手を回してください」

所在は確認出来ているのか、と椎野眞子は言う。

彼は自信をつけているようでして、と友美は仏頂面に戻つて言う。「移動の痕跡が知れても問題ないと思つています。推論ですが、このことも裁判で使うつもりでしょう。不当捜査で精神衰弱となった彼にはまともな判断が出来ないため、刑事責任には問えない。あげくには精神鑑定を行つて裁判を受ける権利を破棄するかもしれません」

冗談で言っているんだろうな、と椎野眞子は言いながら友美に黒塗りのファイルをよこした。

「それからボス、裁判所の許可が下りるのはいつになるのかわからないことと、他の業務と被ることもあるので、実行には最短で一

週間弱かかります」

椎野眞子はファイルを見る、と言った。友美がファイルを開けるとそこには裁判所の許可状があった。

「私はボスである。君がここに来たとき言ったはずだ、手を回してやると。私は強力を惜しまない。私は君らを信用している。仮に君たちが失敗をしても、それは私の眼が間違っていたということで、責任は私が被る。だから行け。さっさと糞を片付けろ」

友美は頭を深く下げた。

平行思考のエンチャントはうまく作動している。

友美の頭の中で、適切なボリュームで平井の声が聞こえた。「ポイントに着きました。これより視覚を共有します」

友美の目は色とりどりのプランターを捉えた。

「庭園のようなものか」

「庭園のようなものですよ。趣味が良い」

風景が揺れる。庭に面するガラス戸が移った。カーテンが閉じられている。

「反応ありますから居ますよ」友美の考えを読んだように平井は言う。多くの職員は考えを読まれている錯覚が生じる平行思考を気持ち悪く思っている。友美もそうだ。

「では、これより伺いますよ」

「戦術レベルは直前に指示する」友美はそう呼びかける。

平井の移動で視覚はぐらぐらと揺れる。玄関に着いた。

「演習どおりに動けよ。レベルはB+だ。これはあくまで偵察だ。では、未整理文書庫と回線を繋げ」

「了解」

平井の手が友美の目に映る。インターフォンを押した。少し待った後、玄関が開いた。

「水道局の者です。水道メーターの移動についてお話が・・・」

「多分警察関係の人でしょ？わかってますよ」

開いた扉からちらりとこちらを覗いた短髪の男がそういうと、視覚共有と平行思考のエンチャントが気圧されて消滅したことがわかった。

バンの中で知美は考える。

（この後御木はどうするのか。情報部は記録が取れているのか？本当に強い男だな。簡単に文書庫管理のエンチャントが蹴散らされた）

「伊藤、車を回せ。」

「了解。音波遮断と痕跡消滅のエンチャントを最大強度で行きます」

水道局のバンは住宅街を抜けるべく、一切音を出さずに駆け抜ける。

「国道に出たな。一度高速に乗ってくれ」

「わかりました。友美さん、調査部から記録開始の報告が入っていました」

「変に律儀だな・・・高速に乗った後はしばらくドライブ。適当なパーキングエリアで調査部と通信、合同で情報を整理して文書庫に送る。その後は個人行動で二日程度、潜るぞ」

友美はそこで顔を横にして視線を外に移した。風景は友美の頭の中に入ってこなかった。

高速に乗った後も友美は気が休まることは無かった。

「伊藤、調査部は？」

「いえ・・・まだ何も」

「開始の報告があるなら終了の報告も・・・」

「まさか・・・」

「いや、調査部は徹底的に迷彩加工や不認識のエンチャントで自身をデコレートしている。それより、平井が粘つてると解釈したほうがいいだろう。だが、なぜ粘っているんだ平井・・・」

「こちらから呼んでみますか？」

「いや、彼らの身を少しでも危険にさらすことは避ける」

バンはパーキングエリアに入った。友美は伊藤に小休止を告げた。伊藤はバンの中から見えるお手洗いに向かっていった。

バンの中で一人になった友美は大きく息をついた。肥満系で、ひたすら実力のみで彼女は人が苦手だった。

急に、呪文が友美に届いた。友美は反射的にディフェンス・コンデイションをAに引き上げた。呪文のシリアルは照合すると、平井のものだった。

（平行思考の要請だ・・・作戦後の行動についてそんなことは決めていない。もしか・・・）

友美は意を決して平行思考のエンチャントをかけた。

彼女の目はお手洗いの入り口を見ている。

「始めまして」

隣人に挨拶するように、御木の声は普通だった。

「始めまして。茂木裕子です」友美は嘘をつく。

「嘘。高砂さんでしょ」

友美はいよいよ絶望した。平井はもう死んで、暴かれている。

だが、彼女はプロフェッショナルである。

「そうです。嘘です。ではご用件を伺います」

「要求があります」

「何でしょう」

「調査部の記録を見逃します。未整理文書庫そのものも見逃します。その代わり、文書庫のサーバーにアクセスしたい」

「却下します」

「そうですか。わかりました」

友美はお手洗いの入り口を見ている。

「ご用件は以上でしょうか」

「それと感謝がしたい。これは僕の優越感を満たすだけの、いわば自己満足な行為なんだが」

「感謝？」

友美はお手洗いに入っていく年配の男性を見送った。

「新しい概念だ。世界は魔法を野放しにはしないからね。最初は魔力だけで試行錯誤だが、魔法と呼べるだけの技術も手に入れた。特に平井さんは高度な魔法使いだったから勉強になった」

「・・・」

「自分の身体を構成する全てを電気信号に変換して文書庫のサーバーに逃げ込もうとしたときは感動で震えたよ。まだ科学が為し得ない電脳化というやつかな・・・」

友美はお手洗いの入り口を見つめている。

「それに、僕は応用が得意でさ、平井さんを暴き尽くした後は色々してみたんだ。調査部の人たちで」

友美はお手洗いの入り口から目が離せない。

「伊藤さんも楽に殺せたよ」

友美はお手洗いの入り口から、先ほど入っていた年配の男性が慌てて外に飛び出すを見た。

攻性対策班 その四 ・積み上げた苦しみの使用予告（前書き）

為政者は一般人の魔法使用を禁じる。

だが、拳銃を手にしてしまえば引き金をひきたくなる人間が、ぬけぬけと欲求を捨てられるだろうか。技術を得た人間は、過程のために目的を選ぶ。

為政者は一部の公務員にのみ使用することを許すことで、国の膝元に優秀な人間が集まるようにした。

歴史の舞台上で魔法の使用痕跡は見当たらない。一部の人間に使用を許可しても、例外なく全ての国は魔法の大規模な利用を一切認めなかったことを表す。

『核の突きつけあい』という言葉は最近になって生まれたが、『魔法』という言葉ははるかずっと昔よりある

攻性対策班 その四 - 積み上げた苦しみの使用予告

友美が「失意の塊」と呼んでいる記憶はそこで止まった。

喫煙ルームに人が入ってきて、しかも特別な人物だったからだ。

「友美」椎野眞子はただそれだけ言った。

「おはようございます、ボス」友美は立ち上がってそう言った。

「見たか？」そう言っただけで椎野眞子は顎を出す。

「はい。綺麗に無くなりましたね」

友美はわざと気丈に言う。機密の保護を理由に特定の人物以外手をつけることを禁じられた、平井と伊藤のデスクが職場から消えた。保護の理由が無くなり、椎野眞子が許可を出したので、今日の朝早くに遺族が彼らの私物を引き取ったためだ。就業時間前よりだいぶ早めに家族は来た。その理由は自分にあると友美は思っている。そしてそれは実際当たっている。

そうだな。あれにはさっさと消えて欲しかったから助かったよと椎野眞子は言う。

「彼らの机を見るたびに、羊の血の池で共に訓練したことを思い出すからな」椎野眞子は小さく呟いた。

「ボス。今日の午後に県警と・・・」

「ああああ、言わんでいい。捕まえるんだろう？前にもいったな？攻性対策班のボスである私は、この件に関して高砂友美の自由裁量を許す」

友美は少しの間口を閉ざしてからこう言った。「何が起きようが何がどうなろうと、御木は捕まります。これは決定了。なぜなら彼はたった一人で、しかも敗北を知らないからです。一方、我々、公務員は苦汁を飲んでいます。何度も負けています。はるかずっと昔から。この苦しみは彼を絞首台に連れて行きます」

椎野眞子は口角を上げた。「そうだ、それだ。我々には積み上げた物がある。友美はそれを使っただけ？ああそうだ、私はそれを良

いアイデア、御木の首をくくらせる良い手段だと思う」

友美は何も言わなかった。代わりに視線を下げてただだった。

それきりお互い黙ったままだ。沈黙とは少し違う。

ようやく友美は言った。「お先に失礼します」

それを聞いた椎野眞子は顎を下げて喫煙ルームの奥へ進んでいった。

友美はそこから立ち去る。

ただ一人、そこで椎野眞子はしばらく煙草を吸っていた。

若手だった頃の彼は安定剤の役割を煙草に求めた。

だが、必然的に冷静になる手段を身に着けた彼には煙草はもう意味がなかった。

彼のデスクには電子データ化処理を施されていないファイルが仕舞われている金庫がある。

彼はそれを「闘争の記憶」と心の中で呼んでいる。

彼が部下と共に対峙した、一般に広まることのない、最悪の犯罪者のデータがそこにある。

人類の叡智、岸本美奈・・・神の吹かす風、上野順次・・・

戦鬼の使者、武本香織・・・52枚のジョーカー、竹村栄治・・・

箱の中の猫、木村香奈・・・羅列された変態、佐東昴・・・

きりが無い。

そしてこれらの多くは生きていない。椎野眞子が殺してやったからだ。

運良く裁判を受けることが出来た者も死刑台に昇り、ごく少数の生きている者も網走刑務所や東拘に詰め込まれ、虫の息である。

彼らの殺意、彼らの死線を踏み越えようとするのに、いちいち煙草を吸うのは無駄だった。

彼にとって喫煙ルームはコミュニケーションの場でしか無かった。にもかかわらず、彼は一人で煙草を吸っている。

（快樂のアパート、御木直哉・・・高砂にやれるのだろうか？）

椎野眞子は何度もそう思い、何度も打ち消す。

（高砂友美なら御木直哉に勝てる）

高砂友美は文書庫の外に出た。

強い日差しが知美の目に刺さる。彼女は目を細めてすぐ近くの公民館に向かう。

こげ茶色の教育福祉会館はぱつと見、古い施設のようだが、その内情は最新鋭である。その3Fから5Fが公民館である。

彼女は中に入ってすぐ近くの受付に向かう。

「。。。大学OB演劇サークルの者ですが・・・」

5Fと聞いてから友美は礼を言って足早に受付から去る。

エレベーターに乗っている間、彼女はニコチンを必要としていた。エレベーターの扉が開く。

申し訳なさそうに「演劇サークル」と張り紙されている大会議室の扉を見つけても、友美は躊躇しなかった。

「社会教育法でご存知でしょうか？」

殺意が散りばめられている大会議室の部屋で、友美は県警の捜査官連中にそう言った。

「知っています」

捜査官の一人が笑顔でそう答えた。笑顔の仮面の下に、殺意と不安が隠れているのを友美はじつと見つめた。

御木直哉は威力偵察の後も、変わらずそこに留まっていた。

（あれはてつきり逮捕されるかと思ったが、まさか威力偵察とはね・

・・・）

カーテンを閉め切った薄暗い部屋で、趣味の良い木造チェアに腰かけてずっと御木は考えている。

彼は全く身動きをとっていない。

（一人逃したやった。本隊が来るのはいつだろうか）

（本隊・・・本隊ねえ）

御木の口角は自然と上がってきた。

（この時代に本隊か・・・）

（いずれにせよ、刺客が来るのは間違いないだろう。何人が喰って・
・それから姿を消そう）

（ん・・・刺客？・・・刺客ねえ）

（出力される言葉がなんだか可笑しいな。何なんだろう）

御木は余裕だった。幾たびの襲撃や勝負で、確実に成長している
こともあって、簡単にはやられない自信もあるようだ。

玄関の鐘がなった。音の無い世界で、不気味に反響する。

彼は反射的に調査のエンチャントを放出。

（まさか・・・すごいな）

御木は立ち上がって、玄関に向かった。

チェーンを外して鍵を開ける。

防壁をA+に設定して、若干の恐れと興奮を伴いながら、彼は玄
関の扉を開けた。

「おはようございます。柏市立未整理文書庫の高砂と申します。
少々お話を伺っても？」

攻性対策班 その五 ・前提によって難易度は変わる

依然、カーテンは閉められている。

だが、高砂の訪問で室内はそれなりに明るくなっている。

古い室内灯だ。その真下、リビングに置かれているアンティーク系列のセンターテーブルを挟む椅子の片方に高砂は座っている。

高砂は少し身体を捻って、リビングを一望できる台所に目をくれた。

御木がいる。忙しい様子でお茶を淹れる準備に取り掛かっている。

（茶を用意するのに何であんな忙しそうなんだろうか）

座っている高砂からは御木の手元は見えない。

体勢を元に戻す。視線の先に、円柱のセンターテーブルと、その向こうに高砂が座っているのと同タイプの椅子がある。さらにその向こうには閉じられたカーテンが見える。大人しい茶色だ。

「失礼」御木の声がした。

テーブルの上に上品なティーカップが置かれる。

「リチャードジノリ？」

「ええそうですよ。高砂さんは好きですか？」

「いえ。知っているだけです。食器にブランドが必要かどうかわかりませんので」

「必要ですよ」そう言つて御木は高砂の真向かいに座る。

「なにせ扱いが慎重になりますからね。それは日常生活にも影響を与えます」

高砂は調査のエンチャントが毒物等の潜在を否定したのを感じた。

「砂糖は」

「忘れてた・・・僕が言うのもおかしいですが、客にしては厚かましいですね・・・」

「客ではありませんから」

それに御木は応えなかった。彼は立ち上がって台所に向かう。

ゆつくりとティーカップを口元に近づける。

微かにシナモンの匂いがする。

高砂は飲まずに置いた。

「ミルクもありますよ」

御木の声と同時に、テーブルの上にガラス製のとても大きなストッカーと、それと同サイズの陶器瓶が置かれた。

「お茶請け」高砂は言った。

御木は一瞬だけ身震いした。たじろぎが急速に、こぼこぼと泡と一緒に沸いて出たようだ。カップの底からではなく、自分の身体から。

「突然来訪されるケースは想定しなくてですね」

口から出てきた言葉は高砂の耳と御木の脳に伝わる。

「では席に着いてください」

そうだった。御木は立つたままだった。

言われるがままに席に着いた御木は、何も入れずにティーカップを口元に運んだ。

高砂は動いていない。手を膝元に置いて、少々俯いた頭で、じつと机の上を、何も見ていなかった。

御木はカップをテーブルの上に戻した。

「ご用件を伺います」

「逮捕する前に、個人的に貴方とお話をしたかった」

「個人的なお話とは」

「色々。過去に人を殺した経験はありますか」

「論理的にはイエス」

「初めて人を殺した時はいつごろでしょうか」

「答えられない」

「わかりました。では、ご自身が裁判を受けている様子をイメージ出来ますか」

「出来る」

「そのイメージについて、詳しくお聞かせ願えませんか」

「それは無理だ」

「そうですか」

会話が途切れた。

ベランダの隅にあるラックに置いてある時計の音が、ようやく高砂の脳に届いた。

「逮捕しますか」御木が口を開いた。

「私はしません」

御木の体が若干硬直した。

「なぜですか。公務員だったら誰でも逮捕権を有すると聞きましたか」

「誰でも、というのは間違いですね。とにかく、逮捕するのは警察に任せます」

「では、なぜここに」

「その前に、私の質問に答えていただけませんか」

「なんでしょうか」

「なぜここにいるのですか」

「逃亡してほしいのですか」

「言葉の意味を間違って解釈するなんて、話の逸らし方が卑怯ですね。ただまあ、はい。貴方が冷静である証拠となりますので」

「それは解釈次第では？しかし、逮捕するつもりは無いのに、裁判のことをお考えですか」

「はい。では、先ほどの質問に答えていただけますか」

「そうですね。特定組織を狙っているので、ここにいます」

「その特定組織とは」

「いえません」

高砂が始めて御木と会話したときに、彼が未整理文書庫を狙っていると判明している。ゆえに高砂はその返答で黙った。

「僕の質問に答えていただけますか」

次に言った高砂の言葉は御木の心臓を跳ね上げた。

「敗北した貴方の顔を見なければいけないのです」

御木の瞳孔は見開く。顔は微かに変化し、舌が乾く。少し経って、ようやく御木は言葉をひねり出した。

「詳しくお聞かせ願えますか」

「はい。私は文書庫を積極的に防衛にあたる班に属しています。

負けた時の貴方の表情は、以降の仕事で糧になると思われるのです」
呆れと恐れが、彼に足を組ませた。

「僕には理解できません」

「理解を得ようとは思っていません」

「では、具体的にどうなさるつもりですか」

「貴方は膨大な魔力をお持ちのようですね」

高砂がそう答えた瞬間。

何も変わらないまま、部屋が彼岸になった。フローリングをどんよりとした敵意が流れていくようだ。

「つまり、僕を打ち倒すと言いたいのですか」

微かに好奇心と殺意をかもし出す御木の言葉にも、高砂は動じなかった。

「はい」

「ご存知でしょう。あのような人間をあのよう、何人も僕が葬り去ったことを」

「でも私なら勝てます。なぜなら、私の特色はとても強いからです」

「いい加減にしてください。貴方は交渉をしにここへ来たのではないでしょうか」

「違います。私は貴方をねじ伏せて敗北の表情を見るために伺いました」

「ふざけるな」

静かに言った御木は立ち上がった。

「ふざけてはいませんが、そうですね。時間も勿体ありませんの

で、取り掛からせていただきます」

高砂はテーブルの上に置いてあったティーカップを手を取った。

御木は呆氣に取られた。

（今飲むのか？そういうえば飲んでいる様子はなかったな。いずれにせよこいつは相当いかれている）

高砂はカップの中身を御木に向けて放った。

反射的に汚れると思った御木は、うまくそれを避けた。

液体が御木の座っていた椅子に降りかかる。

御木は高砂から目を離して、一瞬だけ濡れた椅子を見た。

高砂に目を戻す。彼女はテーブルの上に置かれているストッカーを手にとっていた。

我を取り戻し、殺してやると思い立った御木が力をぶつけようとした瞬間に、それは起きた。

高砂はストッカーの中身である砂糖を一握り、ぶつけるように威勢良く投げた。

馬鹿なことを考えた御木だが、次には何も考えられなくなった。その痛みは、何かと比較出来るものではなかった。少なくとも彼にとって、経験したことの無い痛みだった。昔、信号を無視した自動車に彼は轢かれたことがあるが、そんなものではなかった。

腹を折り曲げ、土下座するように御木は倒れこむ。

御木は嘔吐した。痛みが彼の頭の中で何度も反響し、跳ね返り、彼を思い切り苦しませた。

御木は何も考えられなくなった。高砂が椅子から立ったことも気づかない。

「衝撃を与えました。扱ったエネルギーの大きさと、範囲から見て、散弾銃のようです。砂糖が貫通しなかったのは、砂糖そのものの脆さと服のおかげですかね。よくわかりませんが。いずれにせよ、体の内部は見るに堪えない状態です。骨とか神経とか。体内なんてどう見ればいいのかわかりませんが」

御木はかろうじてこう思った。殺す気なのか！

高砂はひざまずいて、腹部を押さえている御木の両手をなんとか引つ張り出し、カップと一緒に出されたティースプーンで床に串刺した。

御木の口から涎と共に聞き取れない言葉が漏れる。それは悲鳴だとか怒りを混ぜた、言葉にならない言葉だった。

「貴方が殺した方は全員、逮捕や偵察、防衛が前提でした」
高砂の声が御木に届いているかは傍目ではわからない。

「捜査官は逮捕を、民間人は防衛を、平井は偵察が目的でした。伊藤はもしかしたら、考える時間もなかったかもしれません」

「彼らでは膨大な魔力と殺害を前提にした貴方に勝てるわけなかった」

「ですが、ここに狂った女がいます」

「ナイフを所持した状態で、ナイフを持った相手に町で喧嘩を売られたとします。避けられない状況です」

「私はそこで、躊躇いも無く逆手でナイフを構えることが出来ます。順手でナイフを握りません。私は相手を殺す気で構えます」

「捜査官は裁判を受けさせるために、貴方を逮捕しようとした。

殺害しようにも、仲間が何人も倒れては闘争心が折られるのも当然でしょう」

「平井は優秀な男でした。優秀すぎて、情報を持ち帰るという目標を、見失うことがなかった」

「ですが、私は違います。最初から、貴方を殺す気でここに立っています」

「人間を殺すのは簡単です。誘拐は暗殺より難しいと言いますが、実際手段はいくらでもあるわけです」

「今貴方にして見せたように、莫大なエネルギーを単純にぶつけるだけでも死にます。炎を出してみたり、溺れさせたり、切り刻んだりする必要なんて本来ないので」

「ですが、公務員でない民間人の貴方は先入観で在り方を決めてしまった」

「魔法で人を殺すときは、魔法らしく」

「まるで小説のようですね？ビジュアルがどう役に立つのですか。実際、貴方が相手にした捜査官や平井は、貴方に攻撃するときに派手なことはしなかったはずです」

「私は本気で殺そうとして、自分の扱える最大エネルギーを貴方にぶつけた。貴方は今、『初めて積極的な障害に当たった』と言えるでしょう」

高砂は俯いた御木の髪の毛を上につ張った。

御木の顔は形容しがたいほどに、幼児的で、悲しみの色に染まっていた。

口から漏れる小さな呻きは相変わらずで、鼻や目からも絶望が漏れている。

高砂はじつとそれを見つめて、表情を記憶した。

だが、高砂の心は別のところで満たされていた。

平井と伊藤のことを彼女は考えているのだ。

攻性対策班 その五 ・前提によって難易度は変わる（後書き）

お久しぶりです。

序章だったのがいつの間にか本章に。

体力無くてスイマセン。

攻性対策班 その六 - 終わった瞬間に次が始まる（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

~~~~~

失業者を増やすようで実は、雇用の流動性を高めて失業率を減らすという解雇規制緩和。

軍隊もしくはそれに準じる組織や警察組織の採用枠を増やす雇用対策。

給付金を配布することで消費を促す経済対策。

企業を活性化させて経済を動かし、さらに雇用を発生させる法人税下降調整。

職業能力開発と、条件付で行う職業訓練給付金による就職支援。雇用を発生させる新規市場開発（日本では主に介護）。

高速道路の料金を下げることによって『流通を軟化させる』経済対策。  
株式買取による企業支援。  
金融緩和利下げ。

『魔法の野放し』は、人々の生活を守るこれらの経済政策を全て消し去る。人々の命を守るこれらの選択肢が、野に存在する魔法で全て、無くなってしまう。

~~~~~

攻性対策班 その六 - 終わった瞬間に次が始まる

椎野真子の目が、深淵を覗くような慎重さを伴って高砂を見つめた。

「口頭報告を始めろ」

ブラインドが閉じられている。夕暮れだった。そして、御木が倒された日だった。

相変わらずの無表情で、高砂は椎野真子の顔をようやく見た。彼女は椎野真子の部屋に入ったきり、心あらずという様子だった。

「かしこまりました」高砂はそう言って、軽く頭を下げる。

頭を上げて、高砂が報告したのは「御木が高砂に潰される様子」だった。

「つまり」椎野真子は高砂の言葉が途切れてすぐに言う。

「御木はもう逮捕されたんだな？」

「はい」高砂は軽く顎を引く。

椎野真子はチェアに深く肩を預けた。

この瞬間に二人はデスクを挟んで、お互いに誇りを共有した。

「よくやったと思う」

椎野真子は言い直した。「よくやったと私は、思う」

高砂は反撃するような速さで畳み掛けた。「私も自分によくやったと思います」

「警察は」椎野真子が言う。

「喜んでました」高砂は椎野真子の発言を遮る形で言った。

「違う。今日一日、彼らは何をやっていたのだ」

「支援ですかね」

「具体的には」

「もしも、に備えて待機」

「それだけか」

「現場の方々はそうです」

「現場？」

「上層はどうやら、根回しを行っていたそうで」

椎野眞子は肩で大きく息を吐いた。「御木の人脈は厄介だ。裁判は難しいだろうな」

「でしょうね」高砂はただそれだけ言った。

「ああそうだ。解せんことが一つある」呟くように椎野眞子は言う。

「为什么呢」

「殺す気で挑んでおいて、なぜ御木は死ななかった」

高砂の顔に影が生まれた。

「警察との取引と、自尊心の問題です。私には敗北に打ちのめされた表情が必要ですが、死体はいりません。私は攻性対策班の職員であって、攻性対策班の殺し屋ではないからです」

「取引とは」

「単独行動を認める代わりに、生きたまま引き渡せというものです」

「その条件でこの結果か。本当によくやったと思うよ。生きたまま渡せと圧力をかけられてもなお、躊躇が無いという自分の特色を最大限使ったのだからな」

そして椎野眞子は体に力を漲らせた。「他には？」

「ありません。それだけです」

「ほお」椎野眞子は人を馬鹿にするような顔つきで、そう漏らした。

「同僚を半分殺されて麻痺したんじゃないですかね。いや、知りませんけど。だからその程度のやりとりで外注を行った」

「私を舐めているのか高砂」

二人は黙った。

高砂はあまりにも動かないので人形だった。

椎野眞子は人形をじっとみつめている。

部屋の蛍光灯は数日前に交換したばかりで、その明るさは埃や

汚れの他にも欺瞞や策謀すら照らしてしまいそうなものだったが、二人の間に降り立った光は探る様な視線と隠そうとする思考のフィルターで逆に場を暗くしている。

「数人の部下が県警と合同訓練を行うのは知っているな」椎野眞子が口を開いた。

「はい」

「訓練の内容に尾行と戦闘を設定し、それに準じて装備や場所を整えているな」

「はい」

そこで椎野眞子はデスクの引き出しから茶のファイルを取り出して高砂に渡した。

「まだ見るな」

高砂は脇にファイルを挟んだ。

「さて、私は部下には正直であってほしいと思っている」

「私は」

「まだ口を開くな。いいか？私は全てを知っている。その気になれば、空の隅々まで見渡せるのだ」

椎野眞子の心眼が自身の心を除くような錯覚を高砂は覚えた。

「高砂。私は何でも知っている。そして部下には正直であってほしいと思っている。それでもいいえないのか？」

高砂は口をゆっくり開いた。「県警と合同で・・・御木の暗殺を」「訓練名義で私の部下を動かすか」

高砂は黙った。

「さつき自分は殺し屋ではないと言ったな」

「重要な約束を違えるほどの馬鹿でもありません」

「なぜ私に報告しない」

「取引内容に含まれていました」

「なぜ律儀に守るかは理解に苦しむがどうせ、何処から漏れるかわからないしボスが意に沿った行動を取ってくれるとは限らないとか考えたんだろう。攻性対策班の仕事ではないしな。しかし、私

はまだ信用を勝ち取ってないようだ。部下の立ち位置を考えられない人間だと思われているとは」

高砂はもう一度黙った。

「ファイルを開け」

高砂は脇に挟んであるファイルを開いた。

「は・・・これは・・・？」

「見ての通り文部科学省大臣の暗殺命令書だ。対象は御木」

椎野眞子は次にこう言った。自分で言うのも何だが、私はどうしてこんな所で才能を埋まらしているのだろうか、と。

「あの・・・全く意味が」高砂の顔は打って変わって恐怖と驚きに満ち溢れている。

「うるさい。とにかく、まあなんだ、失敗するなよ」

「一つお尋ねしても」

「なんだ」

「どうしてここ、未整理文書庫に勤務なさっているのですか」

「やはりそう思うかな」

「勿体無さ過ぎます。というか意味がわからない・・・日本中を探しても、ボスしかいませんよ・・・文部科学省大臣の命令書を持ってこれる地方公務員なんて・・・ありえない・・・」ファイルを持つ高砂の手は汗を浮かべ、震えている。単なる紙が、これほどまでに重く感じる経験を高砂は知らなかった。

「その質問には答えない。・・・もう時間じゃないか」

椎野眞子は携帯を取り出して時間を確認した。「うむ。そろそろ帰宅してもいい時間だ」

「ボス」

「まだ何か？」

「いえ・・・何でも。それではお先に失礼します」

「ご苦労だった」

深く礼をして高砂は去った。

椎野眞子は彼女の背中を見送った後、しばらくの間身動きしなか

った。

彼は今、何も考えていない。

夕暮れと入れ替わりに夜が訪れた後、攻性対策班のボスは人差し指で銃を模した。

そしてそれを、部屋の入り口に向けた。

「葬れ。未整理文書庫の敵を。それが攻性対策班」

発射音を口で出す。彼が人差し指で作った銃の目標は、あまりにも多すぎる。

それから、椎野眞子は手早く帰り支度をして部屋から出た。

部屋に鍵をかける。

そして彼は夜に溶けていった。

未整理文書庫に異常は無い。

攻性対策班 その六 - 終わった瞬間に次が始まる（後書き）

攻性対策班のプロトタイプようやく終了です。

これはつまり、彼らの通常業務を切り取ったわけです。

通常業務でいきなり御木のような存在を出すのはどうかとも思いましたが、そもそも小説は楽しむもんだしっていうか私の小説って・
・楽しい・・・のか・・・？

予定では長期に渡る話を書くつもりですが、なんたるこれ、他にも連載一つあるじゃん。死んじゃう私。

あと、いつかは整理班を出したいです。でも、高砂と合田さんのコンビってすげえぱつとしない。っていうか高砂さんデブだしなあ。まあいいや。困ったら西芳寺と椎野を前面に出せばいい。うん！こちのコンビの方がすげえいい！

ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0791s/>

柏市立未整理文書庫 攻性対策班

2011年5月24日16時56分発行